

言葉で表現できるようになった子どもたちのいる  
保健室で必要なこともあるのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## こころとあたまの人間学から

吉増 克實

わたしたちは、リズム的に拍動しながら永遠の  
更新を繰り返すいのちの宇宙の一部です。ひとつ  
として同じものない一つ一つの個性的なこころ  
は世界に織り成されて無意識のうちに宇宙の万象  
と交流し響きあっています。人間は目覚めたこ  
ろを通じてその作用を受け止める共感の中心とな

り、同時に動かされる肉体を通じてその心を表現  
する中心となるのです。こころはもともと共感と  
表現を通じておのずから伝わるもの。でも、もし  
わたしたち現代人がそう感じられないとしたなら  
なぜなのでしょうか。

わたしはいま、「心の医療科」という診療科の

なまえで、心にさまざまな悩みや障害をかかえて苦しんでいる方たちの診療を行っています。ふつう使われる精神科や神経科ではなく、そんな聞きなれないなまえを使うのには理由があります。精神科というなまえは障害が「あたま」に、つまり知能の働きにあるという考えとつながっていますし、神経科という名前は障害が「からだ」につきまわり脳や神経にあるという考えとつながっています。しかし、人一倍鋭い思考力をもった人でも、また脳波や頭部のCT検査に異常がなくても、「こころ」が孤独や空虚感に苦しむことはあります。こころはあたまとは別に考えなければならぬものなのです。生き生きしている人というのはいまが生き生きはたらいっている人であつて、ただあたまの回転がいい人ではありません。こころのはたらきこそ私たちのいのちを支えているはたらきなのです。「こころ」と「あたま」の区別にはきわめて重要な意味があります。心の医療科で

なければならぬと思うのはそんな理由です。それでもそんな区別について疑問に思う方も多いかもしれません。じつは、私たちは日常的に用いる広い意味の心のはたらきを表す言葉の中で、正確にこころとあたまとを区別して使っています。たとえば温かく包むこころとは言いますが、温かく包むあたまとは言いません。冷静で鋭く切れるあたまとは言いますが冷静で鋭く切れるこころとは言いません。それは広い意味での心の働きに二つのあい対立するはたらきが備わっていることを示してくれています。わたしたちが義理と人情の板ばさみになったり、理性と感情との間で悩むのはそのためなのです。

このような区別  
はもちろん日本語  
に限ったことでは  
ありません。それ  
は古い時代から洋



の東西を問わず行われてきました。たとえば古代ギリシアの哲学者はヌース（精神・あたま）、プシキケー（心情・こころ）、ソーマ（肉体・からだ）を区別しています。思（おも）う」という漢字があります。心の働きを表すこの漢字は二つの部分からなっていますが、下の心の部分は心臓の象形文字、上の田の部分は脳（あるいはあたまの象形文字）です。広い意味の心の働きがこころとあたまのはたらきからなることを心臓と脳を組み合わせるであらわしているのです。ちなみに、この字では脳が心臓に支えられています。脳が心臓の支えを失うと（心臓の横に転がり落ちて）悩（なやむ）という字になります。また日本語のこころは心臓が拍動する音を表していて、「こころ」のはたらきと心臓とのつながりを、あたまはひよめき（頭頂部の大泉門）をあらわし、「あたま」のはたらきと頭や脳とのつながりを示しています。

こころとあたまとの対立は人類史にその根をた

どることができません。人間はこころが目覚めることによって、人間以外の生物の心が食と性の生命的必要にしばられているのに対して、それとは直接の関係をもたないあらゆる世界の現象にこころが動きからだが動くようになりました。それが人類史における宗教と芸術の始まりです。自分に絶えず働きかけてくる圧倒的な魔神的現実に翻弄されるうちに、人間は世界と自分との間との直接的なつながりを絶ち意識し思考することができるようになりました。その結果、いわば夢見つつおのずからできていたことが自分が作り出した目的に向かつて努力しなければならなくなつたのです。楽園からの追放とは人間の心の中に虚無が目覚めることを意味しました。人間の人格の内部で生命と、虚無によって変質した生命作用の中心としての自我とが対立的にはたらいっています。生命と自我との対立をさかのぼると、人間のいのちを含めた一切の生命世界と人間に宿った虚無との対立を

表しているのです。

こころのはたらかはいのちの世界があるがままに受け入れそれと同化しようとするはたらかまで。こころは世界と他者への受容共感と愛と献身として現れます。こころにとつては、一人一人がみんな違うこと（違ってはいるが似ていること）、違ったものがつながりあっていること、時の中で絶え間なく移り変わること（リズム的に更新され、似ているけれど違ったものとしてあらわれること）がうれしいのです。また無条件に好きなものの大事なものを持っている。好きなものが楽しめる、人と一緒に楽しめる、人が楽しくしていることがうれしいのです。こころを動かしからだを動かして生きていることがうれしいのです。こころが動くという意味では悲しみもまた生きる力でもあるのです。こころの目覚めと成長とともに共感する世界が広がりが深まります。こころの成長を促すものは自分とは異質なものに対する共感

身欲求です。

あたまのはたらかは自分とは異質ないのちの世界を自分が支配可能なものにしようとする働きです。あたまは変化を憎み時間を憎みます。あたまにとつて変化しないものこそ価値あるものなのです。頭がいいというのは時間をかけずに簡単に（手間もひまもかけずに、こころもからだも動かさずに、楽をして）目的を達成することです。文明はそのようにして生まれました。文明の発達によるこころの疎外は、こころとあたまの対立に根ざします。あたまによる自己主張、エゴイズムと形式主義（マニユアル万能主義）とは世界と他者への攻撃と要求として現れ、他者や世界との共感のつながりを不可能にするのです。

こころを見失ったあたまのはたらかはいのちの破壊へと向かいはじめます。破壊それ自体を快と感ずること、壊してすっきりすると思うことはすでにそのことの兆候です。時の中でこころとから

だを動かしてすごすこと、心を通わす喜びを育て、広げ、深めることが大切です。そして、ころが指し示す方向をしっかりと受け止めていれ

ば、あたまの働きも、こころといのちの働きを守り強めることもできるのです。

(東京女子医科大学第二病院)

## 存在<sup>ある</sup>ことの嬉しさを伝える

—言葉の世界から—

佐塚 公代

私は二十年近く、地域の子ども達やお母さんやお年寄り達と、絵本を読んだり昔話を語ったりし

て過ごしています。それは息子達との言葉のかけあいから始まりました。長男は三か月位から「ウ